

報 會 曲 千

保存用

上田織維專門學校

上田織維專門學校内

編輯兼 町 田 博

昭和22年9月1日印刷
昭和22年9月5日發行

上 田 市 原 町 二 郎
印刷人 中 澤
上 田 市 原 町
印刷所 中澤印刷株式會社

發行所 社 團 法 人 千 曲 會
[非賣品]

千曲會報の再刊に就て

千曲會理事長 中澤 忠

本會報は三十有餘年に亘り會員唯一の報導連絡機關として多大の役割を果して来たのでありましたが戦争の犠牲となり遂に昭和十九年一月二十五日の會報を最後として廢刊の已むなきに至りました事は誠に遺憾でありました。一昨年終戦以來一日も早く再刊して會員諸君の御期待に添へ度いと當事者一同念願して参りましたが經費及資材に制約せられ今日に及んだ次第であります。併し新日本建設に重大役割を負ふ織維産業に直接間接に關係を有つ多數會員を擁する本會と致しましては會員相互の固い團結と緊密なる連絡こそ織維産業の復興に又母校の發展に寄與する處極めて大なるを痛感し昨年十一月の代議員會の決議に基き萬難を排し茲に久振りに親しみ深い會報の再刊を實現し得た事は誠に欣快とする處であります。

材料其の他の都合で充分の内容を有つとは申されませんが順次内容も豊にして一年に四回位は刊行したいと努力して居ります。故會員諸君も眞に自分等の會報と云ふ御心持で御援助御指導下さる様御願ひすると同時に會報を通して會員相互の交歓に資する事が出来ませう様充分御利用下されば幸と存じます。

千曲會報の再刊を祝し併せて退官の辭を述べ

井上 柳 梧

中絶して三年茲に懐かしい千曲會報再刊の吉報が齎せられ洵に欣喜に堪えぬ

所である。戦争以來會報は中絶のやむなきに至り會員諸君の動靜は杳として聞えず、切々たる論説も讀誦するの機なく只空しく諸君の起居を追想して安泰を祈るのみであつた。戦争勃發に當りては、諸君の多くは萬事を捨てて、劍を提げて戰場に赴き参じた。而して多くの諸君は尊き生命を國家にささげて歸らぬ客となつた。赫赫たる諸君の勳功も、慘憺たる戰場に於ける諸君の勞苦も敗戦の暗雲に包まれて葬り去られてしまつた。更に大陸發展の壯圖を抱きて滿洲に朝鮮にはた中華民国に營々として築き上げた諸君の偉業も功績も無條件降服の悲運に遭遇して空しく捨てて多大の辛苦を甜めて歸國されたる諸君も多數あつた。是等戦争が我會員の中にもちきたしたる多くの悲惨なる出来事も千曲會報の再刊により會員の間に知られ、我々は勁々として胸に湧き立つ同情の念により互に相助けて母校を中核として結合の念を一層固くし破滅に瀕せる祖國日本を復興すべき礎石の一つとなるであらう。敗戦以來我々國民は食糧に衣料に、産業に、經濟にあらゆる方面に茨の路を辿りつゝある。衣食足らず、日々の生活に苦しむ爲に道義は廢頽し、争議は起り闇は行はれ、盜賊は横行して居るのである。是れを救ふの道は速かに産業を復興せしめて國家經濟を安定せしむる外に道はない。然らば如何なる産業に依るべきか、謂ふ迄もなく織維産業特に蠶糸業の復活こそ最も捷徑である。事は何人も首肯する所であらう。茲に於て政府も昭和廿一年八月十三日の閣議に於て蠶糸業復興緊急對策要綱を決定し昭和二十八年には桑園を二十八萬町歩とし産繭四千三百二十萬生糸三十二萬三千三百

俵を生産すべく努力する事となつた。是こそ實に蠶糸報國の好機到来と謂ふべきである。我々千曲會員の正に奮起し腕を振ふべき秋である。此の時に當りて幸にも千曲會報の再刊を見る。諸君は宜しく多年の蘊蓄を紙上に傾注して資業の進展を激勵すべきである。

余輩諸君の母校に職を汚すこと三十有餘年此間諸君の厚情に浴すること幾何なるか知らず、此測り知られざる恩恵に酬ゆる事もなく昭和二十年十一月二十四日退官して閑地につく、過去を顧れば淡雲漠々として何等功績の残るものなきを愧づる所である。余齡還暦を過ぎ白髮老境に入りたるも尚ほ頗る健康、今後力のつく限り蠶糸業並に上田市の爲めに微力を致し併せて母校の發展に資せんことを願ふて居る。諸君の變らざる愛顧を乞ひねがう次第である。

終りに臨みて千曲會の隆昌と諸君の奮勵を祈りつゝ筆を擱く。

會員名簿のお願い

戦争のため永らく休んで居りました千曲會々員名簿を再刊する運びとなり諸君の移動を進めて居ります。何分にも會員の移動が甚だしく殊に外地の諸君も多数引き上げられた模様ではあります。其の後き勤務先、住所等の不明の者も相當多ひました。今度皆様の絶大な御協力をお願い致して今度皆様の絶大な御協力をお願い致して御手帳を存じます。就ては御多忙中行の會員名簿は以後移動されれば十八年度以降卒業名簿係宛御通知下さい。誠に幸甚です。

- 一、勤務先職名並に其所在地
- 二、現住所(自宅)
- 三、未歸還者、留守宅及留守擔當者
- 四、卒業年度並に氏名
- 五、新卒業年度並に氏名
- 六、移動年月日

會員名簿係 坂口 育三

御挨拶

上田織維専門學校長
伊藤 武男

昭和廿年十二月、不肖圖らずも本校を長を拜命してから己に一年有餘を経過致しましたが、其の間一部の諸君を除いて猶多くの同窓生諸君には未だに面接の機会を得なかつた事を残念に思つて居りますので、その紙面を拜借して一言御挨拶を申し述べたいと思ひます。

今度の惨めな敗戦の重大原因の一つとして、國民上下の教養の水準が低かつた事が挙げられて居りますが、まこと、終戦以來の世上の種々相を眺めて居ると更にその感を深くするものがあります。この基礎の上に望まれるが如き高度の文化國家の建設が果して出来るのであろうかと、危ぶまざるを得ないのであります。

是に於いて、教育が國土再建設に當つて、先づ着手せらるべき基礎工事でなければなりません。こゝに謂ふ所の教育とは、勿論極く廣い意味の教育を指すのであります。殊に我々は、戦時中新設された纖維農業科、擴充された紡織科に在來の養蠶科製糸科及び纖維化學科を加へて五科を擁して、國土再建設の經濟的面に重要な役目を果たすべき纖維産業の教育を双肩に荷ふのであるから、その使命は眞に重、且つ大であります。此の國家の要請に應ふべき人材の養成に全力を注がなければならぬのであります。

學心と、圓熟せる諸教授の良導とに多大の期待をかけるものであります。

一方専門學以外の文化的教養、身心の鍛錬については、今度復活した校友會の活發なる自治的活動に俟ちたいと思ふ。若し夫れ、彼のセクショナルリズムの如きに至つては、徒らに校運の進展を阻むものであるから、若し在らば、拂拭されなければならぬ。かくして、全校一丸となつて、眞理を愛し、友愛に結ばれて、明瞭達なる校風を築き上げたいものであります。

加之、本校は近く来るべき學校制度の改革に大いに備ふる所がなければならず、今後益々多事でありませぬ。

これ等の事たる、全校並に同窓の一致協力をお願いして達成出来る事でありませぬ。不肖亦、非才を顧みず、之に精魂を捧げたる覚悟であります。同窓生各位の絶大な御支援、御鞭撻を切に御願ひする次第であります。

母校便り

纖維農業科を紹介する

昭和十九年四月母校が纖維専門學校と改名すると共に從來の養蠶、製糸の兩科を統合して蠶糸科とし、紡織科は廢科された高工の紡織施設を吸収して擴充すると共に纖維原料生産を擔當する纖維農業科が新設されて、實業共に纖維に關する一切の技術指導者養成機關として飛躍的發展をして以來、己に本科も今春第一回の卒業生を社會に送り出したのであります。

當時は緊急な纖維資源の開發並に能率的生産を果すべく主として南方、大陸にその技術指導者を送らんとして師弟共に眞剣な研修を展開したのであるが、想外の終戦を見て止む

なく當初の目標を轉向する事となり、勿論從來の動植物纖維原料の生産並に加工教育の特色を維持しつつ其の基礎をなす一般農業に重點を置き、就中、當校所在地の地域性が高冷地的農業の研修に適合してゐる點、又我國農業の進展の差しづめの活路の一つに標高を高めた農地の開拓擴張にある點、又斯の開拓地に於ける農業が勢力の點からは勿論生活的にも大小家畜を導入れた有畜農業でなければならぬ點(小家畜として山羊、綿羊、兔等纖維動物は必ず登場すべきものである)等の觀點から「高冷地農業」にも目標を置き進んで來てゐるのである。

施設としては先づ校内桑園五反歩を農場に轉換し續いて隣接する農地を購入して現在校内に八反歩、田六反歩を有し、續いて校外二里餘の利村大室山麓に約十町歩の林地耕地を購入し高冷地農業、有畜農業の研究實習農場としてゐる(之を大室農場と稱す)當農場は今尙整備途上にあるのであるが己に學生宿舍、農夫會收納舎、畜舎等約一八〇坪(建築)あり當農夫一家族と綿羊二〇餘頭、牛一頭が居る。(總高九〇〇米以上)

校内の方は己設の外には教官室、學生更衣室、收納舎を設けたのみで、畜舎、加工室は現在建設、準備中である。

高冷地農業、有畜農業に關してはその方面の大家、現八ヶ岳高等農事講習所長及農林省開拓研究所中部支所長の久保佐土美先生を講師として教授指導を願つてゐる。第一回卒業生の就職先は農政局、開拓局、畜産局、縣農務課及開拓課、資材調整事務所、作物報告所、農事試験場、農業會、種畜場、開拓指導農場、地方學校等である。新分野開拓の意味で同窓生各位の今後の御鞭撻と御支援を期待する。

その後の養蠶科

戦時中蠶糸業縮減の影響に依り又他方に於ては纖維農業科の新設の爲め昭和十九年四月養蠶、製糸の兩科を統合して蠶糸科とせしむ

終戦と共に蠶糸業が新日本建設に當り極めて重要性を帯ぶるに至りに依り、再び昭和二十一年四月、蠶糸科を蠶蠶、製糸の二科に分離し開校以來の競争率を突破したる優秀なる新人學生を迎へ活潑なる新發展をなし。又一方蠶糸科として入學した二、三年生も學生の熱烈なる希望に依り養蠶専攻、絲製専攻の二科に分れ極めて眞剣に勉學に精進して居る現在本科の職員は浦生俊興教官を科長とし、佐藤利一、八木誠政、山口定次郎、松尾卓見、關博夫、竹田寛、古平福紀の教官講師諸氏と副手數名である。

その後の製絲科

戦時中の蠶糸業の壓縮は我が校の發展と共に蠶蠶及製絲兩科の合併が成立した。即ち蠶糸科の誕生である。浦生教授のもとに着々整備を進めつゝありたるも本校全體としての設備は縮少の餘儀なき次第であつた。此の間にあつて教職養成科は昭和十九年より一年間として存続し、蠶糸科専修科が臨時的に昨年一月より一箇年の過程を以て増設せられた。然るに終戦後蠶糸が再び重要な見返り輸出品として増産を要せられ、こゝに再び優秀なる技術陣の育成を求めて舊來の養蠶及製絲の兩科に分科し夫々の形態を整へるに至つた。

即ち一時養蠶科として統合の際第一製絲工場を紡織科の擴充へ、教職科教室を新設の纖維農業科へ割愛したがその後この埋合せに第二工場と舊乾燥室を改造して前者を蒸餾から生絲検査に至る工程を施設し後者は教職科の教室となし、更に舊教職科豫科生徒室を工作室とし生徒控室を二室に分けて夫々生徒の實驗室とし尙新たに購入した住宅を建直して教職科の實習室、作法室となし却つて一段の整備を施した。

現在本科の職員は林貞三科長の許に窪田潤萩原清治、白井美明、大龍照太郎、内田貞夫、桶田今朝一、内藤榮吉の教官、講師諸氏と副手數名、教職三名である。

紡織科の擴充

昭和十九年四月校名改稱を機に科名も従来の絹紡織科が紡織科と改稱される事になり、同時にその設備も大擴充される事になった。即ち戰時中國家の方針として我國纖維工業は第一次整理、第二次整理、第三次整理と縮少又縮少の一途を辿り殊に高級製品用の設備は早最我國には將來とも必要なものとして惜しみなく廢棄される事になった。そこで本校では此狀勢を見てそれ等廢棄の運命にある高級紡織機械中教育及研究上特殊價值あるものに對し、轉用保存の申請をして譲渡を受けた機械が少くない。更に又當時工業專門學校に於ける纖維關係の學科は廢止され、之等の設備は纖維專門學校に移管される事になった。本校へは米澤工專紡織科の設備が移管になった。従つてあれやこれやで本校紡織科の設備は又一段の充實を見るに至つた。

次に職員關係では第二代科長として紡織科の基礎確立に盡瘁された岡徳治郎教授勇退、その後へは野口新太郎教授が昇進就任した。尙紡織科に於ては更に修職後の新使命に對處するため職員陣容の強化を企圖し東京工大出身古里孝吉教授、東北帝大機械出身一志淑夫講師、母校紡織科出身後長らく東洋紡にて技術研究に従事してゐた佐藤一郎講師の三新人を聘しその陣容に一段の清新さを加へた。

蠶絲科紡織科の專修科

文部省の指令に基き蠶絲並に紡織業技術者の一ヶ年短期養成の目的を以て昭和二十年十一月復員の中等學校卒業者を兩科約三十名入學せしめ斯業に關する全般の教育を重點的速成的に實施して今年二月卒業させた。尙本專修科は今年より廢止した。

校友會の新發足

戰時中報國團に強制改組された校友會は防

空訓練と勤勞動員でかり立てられて、體育とは遊離し、文化的にも科學的にも殆んど活動の餘地がなく只形骸の如く存在し終戦後舊名に戻つて組織的にも多少整つたのであるが、何分にも學生は終戦の虚脱状態にあり又文化的にも體育的にもその活動資材が殆んど皆無の状態にあり、且つ形式的階級的の官制異が残つてゐた爲、何となく學生生活と遊離してゐたが、その後學生の氣質が一つの方角に纏つて來て校友會を學生生活に合致する自治的なものにし自分等の自覺、反省、創造に於て學生生活を意義あらしめ、以て校風の登揚を圖ると言ふので本年四月から全く職員の手から離れて純然たる學生友交心身練磨の機關となつた。

この間に於て昨秋、三四年振りに催された校庭大運動會には、當時の倉澤總務部長が、學生の主動性を盛つた運動會でなければならぬと言ふ主張の許に運動會準備委員を設けて研究させた點と松木高校の主唱に基いて長野縣高等學生聯盟が出来た點が、民主と言ふ大きな思潮の外に誘導とも刺戟ともなつたであらう。

而して其の組織には會長に伊藤校長、副會長に佐藤利一教官が職員中より入つたのみで他の職員は自由参加の形で、部長、班長一切學生である。特に改められた點は校友會役員の外各級から選出された委員に依つて組織された總務委員會が各部を統轄してゐる點と、議決機關として學生大會を設けた點である。新發足の一步を踏み出したが、經費高と資材難を克服して力強い活動をしてゐる、先づその組織を記せば、

- 會長 伊藤武男校長 副會長 佐藤利一教官
- 一、運動部 (野球班、庭球班、排球班、蹴球班、籠球班、卓球班、陸上競技班、水泳班、スキー山岳班、スケート班、拳闘班の十一班)
- 二、文化部 (語學研究班、文藝班、美術班、映畫演劇班、音樂班の五班)
- 三、社會部 (社會研究班、辯論班、哲學宗教班の三班)

新任職員

昭和十九年一月本會報第三六號を最後に廢刊して以來、紹介する機會のなかつた新任職員を御紹介します。

- 伊藤武男校長
- 昭和十九年十一月二十四日京都纖維專門教育院より井上校長の後任として着任された。分析化學の御専門で昭和十五年學位をとられた。大正七年東大農學部農藝化學科卒、山口縣出身。
- 加藤清時 教官
- 昭和十九年十月、台南高工應用化學科長より着任された。昭和二年九大農學部農藝化學科卒、熊本縣出身。纖維化學科所屬。
- 吉田 鍾雄 教官
- 昭和二十年三月農林省福島農事試驗場より新任された。昭和十一年東大農學部卒、麥の御専門で、纖維作物も擔當されてゐる。兵庫縣出身。纖維農學科所屬。
- 古里孝吉 教官
- 昭和二十年九月三十日助教として新任、二十一年三月教授となる。東京工大紡織科卒 (二十一年九月) 岐阜縣出身。紡織科所屬。
- 岡田隆太郎 教官
- 昭和二十一年十二月京都帝大工學部工業化學科講師より新任された。十七年九月同學部卒、和歌山縣出身。纖維化學科所屬。
- 西澤一俊 教官
- 昭和二十年四月東京文理科大學植物學科嘱託より本校講師に新任された。本年三月教授となる。昭和十一年同大學植物學科卒、酸化化學の御専門長野縣出身。纖維化學科所屬。
- 天白一馬 教官
- 海軍技術研究所技師で勤められ終戦後、昭和二十年十月に講師として新任され、本年三月原田先生の後任として教授となる。昭和十三年京大理學部物理學科卒、三重縣出身。
- 松尾卓見 教官
- 昭和二十年十一月二十日講師に新任、昭和十八年九月京大農學部農林生物學科卒續いて同大學院特別研究生であつた。去る七月教授となる。植物病理の專攻、長野縣出身。養蠶科所屬。
- 松原 務 教官
- 前會計課長依田啓藏氏が昨年九月死去、後任として奈良女高師より十一月着任。本年四月二級官となる。富山縣出身。
- 竹田 寛 教官
- 日本蠶絲製造株式會社在職中應召、病氣で解除、後退却して昭和十九年九月に副手とな二十年七月助教となる。養蠶學擔當。昭和十三年本校養蠶科卒。
- 佐藤一郎 講師
- 昭和二十一年二月新任、昭和九年本校紡織科卒、東洋紡に勤め、退社し本校に來らる。長野縣出身。
- 内田貞夫 講師
- 昭和二十一年六月茨城縣那珂湊高女より新任、昭和二十年東大第二工學部卒、製絲科所屬、東京縣出身。
- 一志淑夫 講師
- 昭和二十一年九月東北帝大工學部卒業して直ちに新任、紡織科所屬。長野縣出身。
- 川端吉成 講師
- 昭和十九年九月農學部卒、同大學助手より本年六月新任。纖維農學科所屬、北海道出身。
- 中村六男 講師
- 昭和二十一年五月より職に退官された和田先生の代りに現任上田中學より兼任で語學を擔當されてゐる。昭和十年東大文學部卒。
- 久保佐土 講師
- 昨年五月より纖維農學科の「高冷地農業」を擔當願つて毎月御講義を願つてゐる。同先生は八ヶ岳高等農事講習所長、開拓研究所中部支所長を現任されてゐる。
- 大瀧吉郎 講師
- 永年の病後福島縣農業會に勤務、昭和二十年七月母校副手となり本年四月講師となる。養蠶科二九回卒。纖維農學科所屬。
- 古平福 助教
- 昭和十七年母校養蠶科卒傳染病研究所に勤務、十九年より母校副手となり去る六月任官、助手となる。養蠶科所屬。
- 堀江清三 教官
- 昭和十九年九月東京高等獸醫を卒業し兵役に應じ復員して二十一年三月母校副手となり本年六月任官となる。纖維農學科所屬。

母校大學昇格問題

昨年秋我國學制の大改革が決定し所謂六三三四制なるものが制定されたのであります。而して此制度は今年度から順次實施される事になりまして、今年は小學校及中學校が之に乘移り、來年は高等學校再來年は大學にと及ぶ譯であります。

而してこれは實に測期的な大改革でありまして今迄の中等學校の相當數はこれにより新制度の高等學校に又從來の高等專門學校の相當數は新制度の大學に昇格する事が豫想されるのであります。

さて母校はその歴史、設備、内容、其他何れの點より見ても我國高等專門學校中屈指のものでありまして、既にその大學昇格の議は屢々朝野關係方面に於て企圖された事があるものであります。

従つて今回の測期的學制改革の好期に際しては是非母校多年の宿願を達成し我國纖維雜業發展に資せんとする考ふるの仕獨り母校關係者のみではないと考へられるのであります。即ち昨秋此學制改革の事が發表されました地元上田市に於ても容々母校昇格の語が持ち上り、その動きは次第に擴大されて參つた情勢であります。

母校及本會逸早く運動に着手す

又一方本會に於ては將に多年待望の好機でもありますので、逸早く萬全の手配を施すべく昨年十二月の中澤理事長及野口理事の兩氏上京文部省に出頭して此問題につき種々本省の意向方針を聴取して歸つたのであります。

勿論當時はまだ本省に於ても此昇格に付いての具體的な方針は決つて居なかつたのであります。然し當局の語る所を綜合致しますると大體現在の高等專門學校中、其の種類、歴史、設備、内容及所在地等の諸條件を勘察して昇格させると云ふ方針の如くであります。で母校の如きは此場合最も有力な候補校であると云ふ自信が持てたのであります。

此事は直ちに學校當局にも報告致しましたので母校に於ては時を移さず學校内に大學昇格實行委員會を設け夫々事務擔當して昇格に關し具體的な調査を開始致したのであります。尙又本會に於ても母校の此の様な手配に呼應して母校昇格期成委員會を設けて夫々委員を委嘱し母校と表裏一體萬端漏なき手配を致したのであります。

母校昇格期成同盟會生る

其後本年一月地元上田市に於ては公私諸會合に屢々母校昇格の語が取上げられるに至りましたので本年二月母校及千曲會合同主催で昇格問題に關し市當局、市會、市商工會議所等の幹部を御招待して懇談したのであります。其際此學制改革の機會に是非大學昇格を達したい、そのためには廣く長野縣全般に亘り官民を一丸とする期成同盟會を結成して縣的運動を展開する必要があると云ふ事に衆議は一致したのであります。

そこで直ちに委員を擧げて期成同盟會結成の準備に取掛り其後數回の會合により全縣に亘る強力な期成同盟會が結成されるに至つたのであります。即ち主な役員を擧げますと。

- 會長 長野縣知事
- 副會長 上田市長
- 顧問 長野縣選出參議兩院議員
- 顧問 上田市會議長、上田商工會議所
- 理事 會頭、小縣郡町村長會長
- 理事 母校職員、千曲會會員及上田市
- 理事 内外官民有力者十數名

の如きでありまして又同盟會の結成趣意書は別記の通りであります。

文部大臣及マツカサ一司令部へ陳情

かくて母校の昇格運動は母校及千曲會の手から全縣的期成同盟會の手へ移されたので本年五月井上同盟會長(上田市長)佐藤理事(母校校長)浦生理事(母校校長)野口理事(母校校長)等上京文部省及マツカサ一司令部を訪問して母校昇格の件を陳情し同時に期成同盟會の名を以つて陳情書を提出して歸つたのであります。

大學設立籌備會議

大學設立籌備會議は、軌道に乗つて組織的な活動を開始したのであります。五月下旬東京に全國農事校長會議が開催され本校からは校長代理として佐藤利一教授出席致しました。其際文部省より今回の學制改革に際し行はんとする大學昇格に關する方針の説明があつた由であります。その説明によりますと今回の學制改革により高等專門學校中から大學へ昇格とするもののビッグアップは文部省が直接手を下して行ふのではなくして文部省の斡旋により設けられた大學設立準備協議會なるものが一つの基準事項を複製し此基準事項に照し合はせて合格したものが大學になり得ると云ふのであります。即ちそれによると大學たり得るものは此程度の設備がなくてはならぬとか又は大學の學部及學科はこれこれのものであるとか其他講座の種類や學科課程等種々の事項に亘つてあるものであります。(此基準事項は目下尙審議中でまだ本極りにはなつて居ないやうですが)所て母校は設備付にては全國各種專門學校中稀に見る立派なもので此點に於ては恐らく有資格と自負するものであります。即ち學部と學科の分類に付ては相當であるのであります。即ち母校は纖維專門學校として纖維の原料からその粗品の加工に至る一貫的教育機關でありますので從來の學的體形から云ふと農學から學部に亘る學部であります。而して今迄の大學に於ける學部の區分では農學及大學はあるが纖維學と云ふ部はないのであります。即ち母校昇格上何等か問題ありとせば此處にあるのではないかと考へられるのであります。

されば母校を纖維大學に昇格させるに付いては此基準協議會其他に對し我國として纖維教育の重要性を強調し新に纖維學部なるものを獨立させて母校をそれにとつた纖維大學とするか、或は若し此纖維學部の獨立が容易でないなら農及工の兩學部の中から纖維に關係ある學科のみ取り上げた農工大學とし其名稱を便宜纖維大學と名乗るかの二途の何れ

かに依らねばならないのであります。

長野縣綜合大學問題

かくの如く母校の昇格運動も順次具體的困難に迄つき進み只今の情勢では恐らく大學には開運なく昇格するであらうがどんな大學になるのか農工科大學になるか、纖維大學になるのか又は、と云ふ點迄進んで來てゐるのであります。かゝる時去る六月初旬長野市に開催された長野縣專科校長會議(縣内に八高専あり)の席上突然某校長から長野縣に綜合大學を設置する様その筋に建議しようとして云ふ提案があり此問題は續いて同月中旬松本市で開かれた第二回縣内高専校長會議迄持越されたのであります。

此提案は恐らく今回の學制改革に母校のみでは昇格の見込なき學校が他の有資格校と抱合つて綜合大學にならうと云ふ考へから出たものと想像されるのであります。我々として元より長野縣に綜合大學を設置する事に異議はないのであります。但し大學になるには基準事項に照し合せて設備其他が之に合格せねば出来ない事になつてゐるからには只簡單に綜合大學を設置すると云つても早急に其實現を期する事は出来ないものであります。即ちとみると單科大學ならすくにもなれると云ふ學校が綜合大學の仲間入りをした爲に足踏して機會を逸するが如き事は探る所でないのであります。されば母校としては此際單獨で單科大學への昇格を期し後日必要あらば綜合大學に合流すると云ふ意見を添へて本件に贊成した次第であります。此長野縣綜合大學案は一應建議案としては成立しましたけれども然し以上の如く母校の昇格はこのために何等の制肘も受けない譯であります。

三織專科協同戰線

母校の大學昇格運動は斯様に逸早く着手し順次有効適切な手が打たれました結果情勢は大體有利に進みつつある模様であります。然し尙所屬學部及學科の區分等に付きましては今後の運動如何によりまして更により良い成果が得られるものと考へられるのであります。

此意味に於て上田、東京、京都の三織維専門學校が相提携して強力な運動を展開する事は大いに意義ある事と考へられるのであります。斯る考は期せずして三校の間に醸し出されまして去る六月中旬此問題に付き京都織維に於て三校長及三校同窓會代表の會議が催される事になり、母校からは校長代理として佐藤教授及同窓代表として野口教授が出席致しました。其席上では

一、三織維専校は共に織維大學に昇格する様協同運動を展開する事

二、まづその第一手段として三校同窓會代表の名を以て陳情書を文部大臣及マ司令部へ提出する事

三、昇格資金の調達及情勢に應じ随時適切なる行動を展開し得る様東京に三校同窓より成る一つの運動母體を設ける事

等を決議したのであります。續いて六月下旬東京に三校長三校同窓代表及三校在京同窓代表の打合せが開催されました。母校からは校長代理佐藤教授、同窓側より浦生、野口兩教授、東京同窓代表として野崎、味澤、小林の諸氏出席し、協議の上、

一、在京三校同窓より成る昇格運動母體を織維教育協會と名付け事務所を織維業會内に置く事

二、大學設立基準協議會對する運動の手段として三校協議の上織維大學設立の基準事項とも稱すべき具體案を作製し之を前記協議會に提示して參考に供せしめる事

三、右のために七月初旬上田に於て三校代表會議を開催して織維大學の基準案を作製する事

等を決定し更に前同京都に於ける打合せに從ひ文部省、マ司令部及參事兩院文教委員會に對し三校同窓會代表の名による昇格陳情書を提出して散會したのであります。

續いて今回の三校打合せに基づき七月初旬上田に三校代表者參集して織維大學設立に關する基準事項とも稱すべき諸事項を協議作製して

同月中旬三校長の手より文部省を経て大學設立基準協議會等に提出し同會委員が織維方面に對し充分の認識を持たれる様參考の資にと供した次第であります。

全會員の聲援を望む

以上が今回の學制改革に際し母校、本會、地元官民による大學昇格期成同盟會及三織維専門學校協同大學昇格運動のあらましであります。斯様にこの學制改革のチャンスに乘り是非母校年來の宿望を達成すべくこの手とあらゆる努力を傾注してある次第であります。どうか會員各位に於かれましても之に對し絶大なる御支援を賜り斷じて此パスに乗り遅れるが如き事なき様希望して止まない次第であります。

上田織維専門學校大學昇格期成趣意書

我國に於ける織維産業の持つ重大使命から觀て從來織維大學が一つも無かつたことは我國教育界の一大缺陷であつて、殊に終戦後織維産業の振興が焦眉の急を告げつゝある今日一層其感を深くするものであります。然るに此際假令如何に巨額の費用を投じましても織維大學を早急に新設することは資材、教官、其他の關係で到底望み得るものではありません。それで此の場合若し織維に關する既設の最高教育機關である織維専門學校の施設を擴充整備して之を大學に昇格せしめることが出来れば織維大學設立に最も捷徑であること信じます。此の意味に於て上田織維専門學校は此の選に入るべき最も有力なる候補者たることは自他共に之を許し居るのであります。

抑々本校は元上田織維専門學校の名稱で明治四十三年に織維業の中心地たる上田の地に呱呱の聲をあげ爾來年を閲すること三十有九年、此の間創立當時僅に養蠶科及び製絲科の二科を有するに過ぎなかつたものが大正八年には織紡科、昭和六年に製絲教婦科同十五年に織維化學科を増設し、同十九年には更に織

維農薬科を加へ校名も上田織維専門學校と改稱されて今日に及んだものであります。かくて本校は本科の織維農薬科、養蠶科、製絲科、紡績科及び織維化學科の五科と別科の製絲教婦科とを包含し常に蠶絲に止まらずに廣く一般織維に對しても其の原料の生産から加工製織に至る迄縦走一貫の綜合教育並に研究の一大機關となり、其設備内容の充實は眞に實業専門學校中稀有であると云ふべきであります。而も初代針塚、二代井上、三代伊藤の三校長の下に銳意有爲の教官を集め、今や九博士を含む斯學の權威者を網羅し其旺盛なる研究心と相俟つて斯界幾多の發明、發見と枚擧に遑なき斯學の貴重なる研究論文の發表とがあり、又開校以來既に三千名に垂々とする卒業生を社會へ送つて居りますが、實實剛健挺身主義汗の體験等をモットーとする校風に育まれたる彼等は各其職場に於て何れも實質業績且つ積極的的活動し陰に陽に織維産業のため多大の貢獻を爲しつゝあります。加之本校所在地なる上田市は今日も尙蠶絲業の中心地であり、又山紫水明、大氣清澄、且閑靜な勉學に最も好適の地であつて近時識者の間に稱へられる大學教育の地方分散の趣旨にもよく合致するものであります。然し本校を大學に昇格せしむるためには勿論更に設備内容の擴張整備を圖らねばなりません。其の爲には相當多額の費用を必要とする見込であります。國家としては學制の劃期的大改革期に直面して居るので各學校の昇格費迄も負擔することは恐らく至難であります。従つて學校自身を中心として何等かの方法で此費用を調達せねばならぬと思ひます。即ち地元たる市、縣、同窓會役員等は申すに及ばず廣く一般特志家の大なる御同情、御協力、御援助を仰がなければ其の目的を貫徹することは到底覺束ないと思ひます。

此機會に於て幸に興論であり、又本校年來の宿望である本校の大學昇格が實現された曉に傳統の旺盛なる研究熱と多年培養蘊蓄せる實力と健實挺身的の校風とが或は骨となり、

昭和三十二年四月

長野縣上田市上田市役所内

上田織維専門學校大學

昇格期成同盟會

上田織維研究會生る

織維産業の振興を圖るは邦家再建上極めて緊要なるに拘らず新時代擔當の技術者を養成すべき學校教育の内容は經費及資材難の爲専門教育に缺くべしとるる事實實驗すら課し得ざる悲況にして前途更に憂慮に堪へない。惟ふに今後の教育は過去に於けるが如き形式教育を排し所謂「生涯しつゝ教育する」新教育方式の斷行を急務とすべく、斯る方式に依り教育せられたる技術者こそ新時代擔當の實力を備へ今後織維産業の振興に大に寄與するを得るのである。

然れ共之が實行に當りては獨り文部省の施設にのみ依存し得ざる現況なるを以て茲に千曲會有志の發起の下に會員組織に依る標記機關を設立し其の運営に依り學校に於ける實習設備のフル運轉を以て學校實習の援助機關たらしむると共に併せて織維科學の應用研究と實務技術者の養成に資せんとするものである。各位には此の主旨を諒とせられ振つて御人會御支援を願ふ次第である。次に會規約及役員名を擧げる。

上田織維研究會規約

第一章 總則

第一條 本會ハ上田織維研究會ト稱ス

第二條 本會ハ左ノ者ヲ以テ組織ス

- 一、正會員 上田織維專門學校卒業生ノ有志
- 二、贊助會員 本會ノ趣旨ニ賛成加入シタル者
- 第三條 本會ハ學校當局ト密着ナル聯絡ヲ保テ、纖維科學ノ應用研究實習ノ援助並ニ實務技術者ヲ養成スルヲ以テ目的トス
- 第四條 本會ハ其ノ目的ヲ達成スルタメ左ノ事業ヲ行フ
 - 一、研究並ニ實習原料ノ確保及其ノ加工處理
 - 二、研究並ニ實習設備ノ設置及經營
 - 三、實務技術者ノ養成及訓練
 - 四、發明考案ノ獎勵及展示
 - 五、纖維類化學製品ノ受託加工
 - 六、研究成績ノ發表
 - 七、其他本會ノ目的ヲ達成スルタメニ必要ナル事業
- 第五條 本會ハ事務所ヲ上田織維專門學校内ニ置ク
- 第二章 會 費
- 第六條 本會ノ會費ハ一ケ年金百圓トス
- 第三章 役 員
- 第七條 本會ニ左ノ役員ヲ置ク
 - 理事十五名以内
 - 監事三名
 - 評議員若干名
 - 役員ハ總會ニ於テ之ヲ選任シ其ノ任期ハ二ケ年トス
- 第八條 理事ハ五選ニヨリ理事長一名、副理事長二名、常務理事五名以内ヲ定ム
- 第九條 理事長ハ本會ヲ代表シ一切ヲ管理スルトキハ之ヲ代行ス 理事ハ業務ヲ掌ス 監事ハ會計ノ監査ヲナシ評議員ハ重要ナル事項ヲ審議ス
- 第四章 名譽會長及顧問
- 第十條 本會ハ總會ノ決議ニヨリ名譽會長及顧問ヲ推戴スルコトヲ得
- 第五章 會 議
- 第十一條 定時總會ハ毎年四月之ヲ開キ臨時總會ハ必要ニ應ジ臨時之ヲ開ク
- 第十二條 總會ノ決議ハ出席會員ノ過半數ヲ以テシ可否同數ノ場合ハ議長ノ過半數ヲ以テシ 評議員會ハ重要ナル事項ニツキ審議ノ必要ヲ生ジタル時之ヲ開ク
- 第六章 決 算
- 第十四條 本會ノ會計年數ハ毎年四月一日ニ

始マリ翌年三月三十一日ニ終ル

第十五條 事業ノ執行ニ關スル規約ハ別ニ之ヲ定ム

上田織維研究會役員名簿

- 名譽會長 井上柳橋
- 顧問 伊藤武男、佐藤利一、佐藤春太郎、奥正巳
- 理事長 中澤周藏
- 副理事長 依田信一、上野榮仁
- 常務理事 中島重清
- 理事 中澤忠、矢澤茂登一、富岡秀、味澤泰造、白澤幹、岡部彌平、橋本景吉、原相模、山田芳一、川船卓爾、野口新太郎
- 評議員 浦生俊興、八木誠政、小宮山太助、野崎清、唐木田藤五郎、小林運美、山口敏夫、瀧澤芳樹、猪坂直一、笠原正巳、小松忠一郎、林貞三、横澤平、倉澤美徳、石坂虎治郎、鶴田定平、高木三治、高木信雄、岸勝彌、湯淺文雄、宮城博、堀久三郎、織田博、小山清、唐澤正平、小林良直、島倉智造、石塚浪之助、鈴木教吾、栗山喜吉、合田信一、柳澤忠次、茅野清三郎、馬場武、森田三郎、飯島貞雄 (順序不同)

上田織維研究會創立經過報告

中澤 周藏

昨廿一年末學校工場の經營に同窓會が乗り出したから擔當者として盡力せよと云ふ中澤理事長から御交渉がありました。本来同窓有志並に各方面の御意見を承りつゝ、蕭々創立の準備をすゝめて参りましたが中間總選舉などのため思ふ様にも進まず五月下旬に至り漸く陣容も整いましたので六月十日を以て創立總會を開き別項の通り會則並に役員の決定を見

ました次第であります。之より先き約七十名程の方に創立準備委員を御委嘱申上げ創立に要する資金として會費の前納を御願ひ致しました處總會開催日迄に金拾萬八千圓の現納及び豫約を完了致しました。

會則事業計畫等に關し詳細御報告致すべきですが紙面に餘裕がありませんので省略致しますが詳細は各支部長の御手元迄御届け致しますが各支部に御問ひ合せ願ひます。尙此機會に一言御挨拶を申し上げます。小生等夫々理事長等の御役を汚りましたが非才微力にして會員諸兄の御後援なくしては到底事業の完成を期し得ません。希くは母校發展のため今後研究會が充分の發達を遂げ得る様御支援と御鞭撻を御願ひ致す次第であります

千曲會事業部に就て

千曲會も諸物價暴騰の爲會費ばかりに依存出来ない事情の爲昨秋總會の際種々研究された結果、會自體に於て何にか事業を經營し收入を圖つたらどうかと云ふところから出發し、之が計畫は理事者に一任された。そこで理事者に於ては各種研究の結果、千曲會の別働隊として會員有志に依る上田織維研究會を母校内に設け纖維産業に關する各種研究及母校の實習實驗の援助を目的とし勞々多少の利益を得て千曲會運営にも寄與する機關とした。然し其後更に検討の結果多少とも利益を得んとする部面は分離して、研究會は名の示す如く純然たる研究及び母校の教育援助の機關であるべきだとの意見もあり、近く事業體は之から分離して株式會社を設立することにあり研究會は千曲會直營として飽く迄纖維産業の研究及母校の教育援助機關として直進することとなつた。

從つて今日迄に拂込まれた會費は會社が派生すれば其の株式に振替へられ尙超過分は之を會社の借入金として會社でお借りすることになる筈であるから御承知置きを乞ふ。

織維産業振興講演會の模様

昨年十一月十日母校に開催

我々は昭和十九年歴史ある校名「上田織維專門學校」を「上田織維專門學校」と改稱せられると共にその内容に於ては體系はもとより纖維全般に亘り原料より紡織加工に及ぶ縦貫的綜合教育の殿堂として整備擴充せられ、その間科の新設、統合等の事もあつたが、現在養蠶、製糸、紡織、織維農業及纖維化學の五科が併置され入學率も開校以來の高率を示すに至つたことは寔に御同慮に堪えない。斯くて母校の織維産業に對する責務は一層その重きを加へた。

平和の訪れ、織維産業の復興、校名改稱と内容の擴充、それは讚美し、昂揚し、又記念すべき事ではあるまいか。斯の趣旨に基いて先づ茲で織維産業振興講演會を盛大に開催しやうとの話題が持上り急速に之が實現を見たわけである。食糧、交通、宿泊等凡て惡事構下にある今日祝賀の催しをのべて開くことは遠慮すべしとの聲もあつたが、幸にして戰爭の災厄を殆ど被つてない信州の上田に在る我々校こそはむしろ此の秋積極的に此の種の事業により斯業に貢獻すべきであると共に一面教育部面の社會に努力しやうと申合せをしたわけである。

- 一、開會の辭 上田織專教授農博、佐藤利一
- 二、縮業再建の現状及將來 日清紡績常務取締役 成 吉 競
- 三、化學纖維の展望 東洋レイヨン取締役技師長 工博 種村島太郎
- 四、織維技術と纖維資源 東京工大教授 工博 内田 豐作
- 五、蠶糸業の重要性と將來 日本蠶糸業會副會長 吉田 清二
- 六、日本經濟再建と織維工業の地位 東京産業大學教授 經博 杉本 榮一
- 七、閉會の辭 上田織專教授 農博 浦生 俊興

